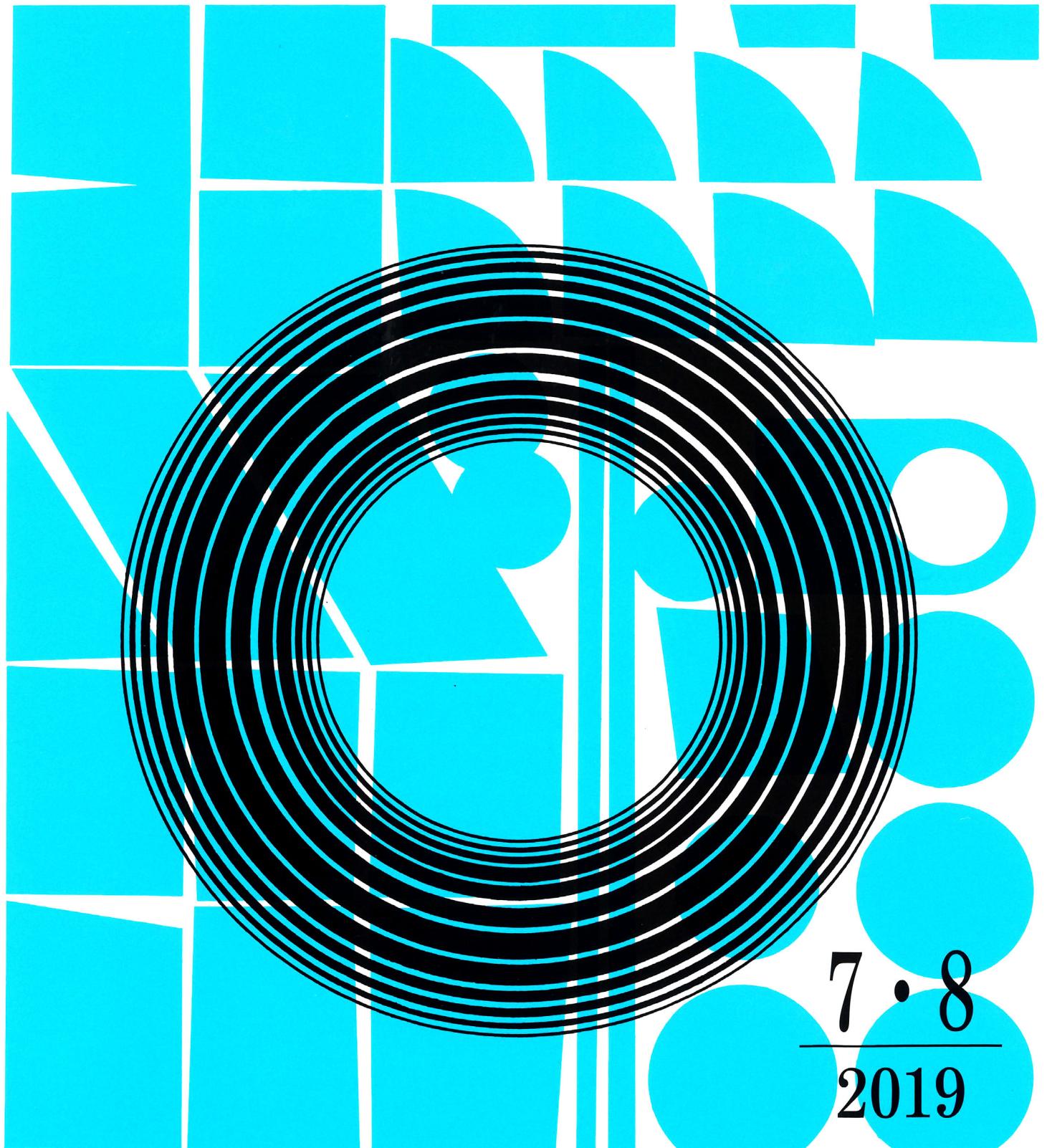


# 産業車両

産業車両と荷役機器



(2019年5月8日 日経産業新聞)

## ◇コマツ

同社の小川啓之社長は東京都内で記者会見し、2022年3月期を最終年とする新中期経営計画で、あらゆるモノがネットにつながる「IoT」の関連事業を強化する方針を示した。主力の建機に加え鉱山機械や林業などの分野でも新たな事業を開拓する。ハードの需要変動に左右されにくくサービス分野の育成を急ぐ。

(2019年5月10日 日経産業新聞)

## ◇コマツ

同社は情報通信技術（ICT）活用による新たな価値を創造するため、人工知能（AI）対応人材の育成に乗り出す。専門知識や技術を教育する研修プログラムを開始。産業機械などから収集するデータを有効に使える人材を社内に確保し、新製品や新サービス、新機能の早期創出を目指す。5年間で約100人を育成する予定。

(2019年5月10日 日刊工業新聞)

## ◇株式会社クボタ

同社は農業機械や小型建設機械などの事業領域で、製品開発やサービス創出を推進する部門「イノベーションセンター」を日欧に新設する。ベンチャーや異業種企業、大学、研究機関など社内外との連携によるオープンイノベーションを加速する狙い。これまで自社主体だった開発だが、外部との連携強化で従来の枠を超えた製品づくりにつなげる。

(2019年5月13日 日刊工業新聞)

## ◇三菱ロジスネクスト株式会社

同社は2024年度をめどに動画やセンサーなどを駆使した次世代フォークリフトを開発する。工場の屋内で可能としている無人による走行・作業に加えて、トラックからの自動荷下ろしなど屋外での稼働エリアが広がる。21年までに製品などの開発に150億円強を投じる考えで、人手不足を解消する無人物流倉庫の実用化を加速する。

(2019年5月21日 日経産業新聞)

## ◇株式会社豊田自動織機

同社は今秋から新型のFC（燃料電池）フォークリフトの販売を始めると発表した。従来製品より小型化して狭い通路での操作性を高める。

運搬できる貨物重量を1.8トンと、同社の従来製品の2.5トンより小さくしたうえで、小回りが利くようサイズも小型化した。

水素燃料のフル充填にかかる時間は約3分で、フル充電に数時間かかる主流の鉛バッテリーを搭載した電動リフトより利便性を高めた。

(2019年5月23日 日刊工業新聞)

## ◇株式会社ジャロック

同社は埼玉県杉戸町に物流危機の意専用展示スペースを開いた。実際に機器を操作して商品の効果を体験できるほか、最新物流危機を間近で見られる。人手不足が深刻化するなか、物流倉庫での働きやすい環境づくりに向けて、顧客への機器の紹介を強化する。

展示スペースは「ジャロックテクニカルトレーニングセンター（JTTC）」で、広さは400平方メートルほど。

(2019年5月27日 日経産業新聞)

## ◇マイクロベル・ジャパン 合同会社

同社は油圧ショベルの遠隔操作を支援する製品を2019年内に発売する。災害時や足場の悪い現場、危険作業区域を安全に作業できる。情報通信技術（ICT）を活用したショベル「Cat320」と「Cat323」に後付けする。

同製品は油圧ショベルと機械に搭載した各種ソフトウェアを専用送信機で遠隔操作する。使いやすさにもこだわり、指1本でも操作できる。

(2019年5月27日 日刊工業新聞)

## ◇村田機械株式会社

同社が27日発表した2019年3月期連結決算は売上高が前期比18.9%増の3009億円で、初めて3000億円の大台を突破した。営業利益は同28.5%増の442億円、当期利益は同81.9%増の312億円。半導体工場向けクリーン搬送システムと、食品やネット通販向けなどの物流システムの両事業が大幅増収で、繊維機械と工作機械も堅調だった。

20年3月期は売上高3444億円、営業利益474